

Title	故田中博士略歴並びに其著作年表
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.4 (1923. 11) ,p.109(573)- 128(592)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19231100-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

故田中博士略歴並びに其著作年表

博士の巖君鳥雄氏は、静岡縣田方郡函南村大竹の人、(嘉永元年誕生、明治四十二年歿)剛直磊落衆を抜き、教育産業等苟しくも民力の發展に資するものに至つては常に私財を傾けて盡す名望家であつた。明治廿五年及び廿七年の兩度選ばれて衆議院議員となり、三十三年農工銀行の取締役となられた。

博士は、鳥雄氏の長男として、明治六年三月七日同村に誕生、郷里の小學を終へ、明治十七年笈を負ふて慶應義塾幼稚舎に入學、抜群の成績をもつて十九年豫科に進級、廿一年正科を終了された。當時の同期生には久原房之助、藤原銀次郎氏等の名士を出してをる。かくて同年初めて大學制度設けられ、文學科開講せられるや、博士は現文學部學長、川合貞一、神戸彌作氏等と共にその第一期生となり、廿五年十二月その業を終へらる。在學

中特に歴史の研鑽に興味を有し、ドクトル・リースの萬國史の時間には博士一人その質問に答へられるのが常であつたと云ふ。卒業後家事の都合にて郷里にあり、廿六年伊豆學校(葦山中學前身)校長心得となりても、數月にて退職された。遺族の談によれば博士は、その初任の日車を驅つて正規の時間に登校せられたるに學生教師なほ登校せず氣短かな博士は、その儘歸宅せられたと云ふ。明治三十一年家君の勧めにより郷土知名の士の傳記を草して近古伊豆人物志を出版された。これ實に博士の處女作で四六判六十二頁の小冊子である。これを修竹齋雜著の一とされ。博士は次いで伊豆名勝志、伊豆人物志續篇を著される意向であつたと云ふ。

明治三十二年再び上京し、同年六月慶應義塾大

學部豫科並びに普通部教員となつて歴史を講ぜられた。夫人の談によれば明治卅年郷里に大洪水あり、出で、附近を驅け廻りたる博士は、圖らずも濁浪の圍む所となつて逃げ場を失ひ、僅かに畑中の梅樹に登つて水の退くを待ち漸く溺死を免るゝを得た。依つて命拾ひを喜び、以後は餘分の儲け物なりと心機一轉、再び上京の決心をなし、慶應義塾の教職につかれたのであるといふ。博士が在郷中の研鑽は、東邦近世史二卷の著となつて現はれた。良著乏しき東洋史界に於て本書は嶄然頭角を顯はし、爾後永く學界の指針となり、今日に至るまで聲價を失はない。

卅八年選ばれて義塾留學生となり、英獨に遊び史學政治學を專攻された。大英博物館等にありて博士の日々騰寫せられたる太平天國の亂關係のゴルドン文書、其他東洋學の資料は今日なほ未發表の學界の至寶である。ドイツにあつてはライプツヒ大學に學び、史學の泰斗ランプレヒト教授に師事された。四十年暮歸朝し。爾來政治科及び文學科に教鞭をとり、政治學、政治學史、列國政治

史、東洋史、史學研究法、西洋上古史、思潮史等の諸講座を擔任し、該博な知識、透徹せる識見をもつて學生の人氣を集中された。明治四十二年五月ドゥン蒙古史上卷を發兌さる。原著は西人の選で最も信賴すべき蒙古史である。譯文は暢達にして流麗。那珂博士の成吉思汗實錄と相對して貴重なる蒙古史參考資料である。本書續卷は遺稿のまゝ博士の書架に藏せられ、全部の完成を見ずして博士の長逝にあふことゝなつたのは學界の恨事と云はねばならぬ。

明治四十三年四月博士は推されて大學部豫科主任となり、爾來十四年間義塾の當局としてその發展のため盡瘁された。煩雜なる事務に鞅掌さるゝ一方博士は研學に倦むところなく、大正二年歐米の政黨政治の著あり、同年四月には東京市主催餘應義塾講演會に「史學の性質及び任務」を講ぜられた。

世界大戰勃發するに及び博士は、太陽、中央公論、新日本、外交時報、大阪毎日新聞等數多の新聞雜誌に寄稿し、時事を評論し、世人を裨益する

所尠少でなかつた。大正三年十月に「世界大戰の

中心人物」を著し、また六年九月には「大英國覇業難」を譯し、ハイデルベルヒの地理學教授ヘットナー氏の所論を紹介する所あつた。單に戦線に立てる者のみ國家に忠勇なる士にあらず。刻々に變化しつゝある世界の大勢を批判洞察し、筆に口に之を世上に傳へ、民衆の指針となしたる博士の功績は國家にとつて忘るべからざるものである。

博士は匆忙の間なほ支那學の研鑽に怠る所なく帝大史學會の請により、明治四十五年四月「太平天國の革命的意義」を、ついで大正三年六月の同會に「元官吏登庸法に就て」を講演し、大正四年十一月三田學會雜誌に「墨銀考」を大正六年十二月の同誌に「義莊考」を發表され、四年八月の甲府講演に「清朝史」を講ぜられた。大正七年より八年にわたり、東洋學報に發表されたる「支那學の沿革」は、東洋史學史上の貴重なる文獻である。大正八年法學博士會は百〇六票中七六票の多數をもつて先生を博士に推薦し、大正十年東京商科大学は博士を聘して「國家學概論」の講座を開設し

た。戰亂おさまりてより泰西思潮の影響により、我

國內の一知半解の徒争ふて新奇の學説を鼓吹し、世俗滔々として之に従ふを見て、博士は斷然世論に抗し、不羈獨立しあくまでも保守主義を宣傳し大正八年一月「普通選舉尙早論」を八年二月「民主々義の限界」を大阪毎日に寄稿し、九年四月「普選運動と病的思想」を十年十一月抄譯「民主々義批判」を公けにされた。その他各種の雜誌に博士の寄稿せられし論文は枚舉に暇ない。

我慶應義塾史學科は博士を主腦として明治四十三年より開設されしもの、學科教授の選擇一に博士の意によつてをる。博士は單に教室に學生の教導に勉められしのみならず、一面三田史學會を起し、隔週には研究會を、春秋には研究旅行を行ひ、たへず學生と接觸し、その個性を觀察し、その指導に倦む所なかつた。卒業後は進んで學生のため就職の紹介をなし一身上の世話をさへ惜まれざりし情誼の厚きことは門人の永く忘るゝあたはざる所である。大正十年十月機運熟して三田史學

會機關雜誌「史學」の創刊せらるゝや博士はその所藏寫眞「ツキヂデスとヘロドタス」を卷頭に掲げ「ギリシヤの二大史家」なる一篇を草し、博士獨特の史學に對する見解を吐露せられた。時恰も公事多忙にして博士は「史學」に主要論文寄稿の暇なかりしも常に書評、餘白録等に簡なれども金玉の文字を寄せられ、本誌が學界に異彩を放つべきため努力せられた。本誌のなる實に博士の餘澤と云はねばならぬ。

博士は亦つとに泰西及び支那の有名な史書を譯し、我國人に歴史の知識を普及せんことを企圖せられてゐたが、國民圖書會社の中塚榮次郎氏の泰西名著歴史叢書の發刊企畫なるに及び双手を舉げて賛同し、諸教授門人と相共に之に従事し、自ら餘暇を割いて「ヘルデル歴史哲學」の譯に従はれた。然してそは今や事業半ばにして博士の逝去を見ることになつたのである。

大正十二年八月の激暑の折柄東都にあつて「ヘルデル歴史哲學」上卷の校正を終へられたる博士は夫人愛兒と共に十二日午後九時四十分新潟縣岩

船郡瀨波温泉にと上野を發せられた。瀨波は海沿ひの温泉場で風景の明媚をもつて知られてゐる。博士は昨夏此處を訪ひてその風光を賞し、今夏再遊せられたのである。寢臺列車の上段に目覺め勝ちな一夜を送られた博士は、十三日朝温泉に到着、安著の旨葉書を自宅に送つて午前九時海水浴のため只一人大字松山海岸にて海中に入つた。汀を去る三間、水深乳房の邊に達つせし頃突如頭を左右に振られると見る間に、博士の身體は海中に没つし去つた。海濱にあるものゝ驚愕は察するに餘りある。附近に遊泳中の某校教諭、並びに學生、直ちに救助に手を盡し、約十分時を経て引上げしも既に多量の水を嚙下し、如何とも術なく、十數分を経て細屋醫師來り人工呼吸を施したるも萬事休す、英魂永久のかへらぬ旅路に上つた。享年五十一歳、翌十四日夫人遺子に守られて遺骸は上野驛に到着、友人知己の涙の出迎への中に自動車に載せられ、麻布我善坊の自邸に入つた。弔門弔電ひきもきらず、翌日十六日青山齋場において告別式を舉げるや、會葬者無慮八百名、當代一流の政治

家學者實業家を網羅し、そゞろに故博士の名望をしのばせた。

博士の急死一度新聞紙によつて國中に傳へられるや、博士の平生を知れるものは、何れもその眞實を疑ひしほどにて、學才、人格正に圓熟し生涯の最も光輝ある場面に到達せんとして突如逝去せられたる博士に對しては何人も痛惜の念に堪へなかつたのである。殊に吾人は、日頃博士が、その「近世政治史」「東洋近世史」「史學研究法」「政治學」等の大著を完成せられんことを期待し、博士自身も日ならずしてそれらの出版に著手さるゝ意向でありしに今はからず博士突然の訃に接して、尨大なる遺稿を見るにつけ、遺憾は筆紙に盡しがたいのである。博士の生前發表せられし著作の年表を今左に掲ぐ。

明治三十一年七月 近伊豆人物志(脩竹齋雜著之一、全)
 三十二年七月 英國東洋印度會社の創始 時代(慶應義塾學報)
 三十二年十月 歴史教授法の一例(慶應義

藝學報)

三十二年六月及三十五年十二月 東邦近世史(上、下二卷)

三十三年八月

劉知幾の歴史研究法(慶應義塾學報)

三十四年二月

阿富汗帝の真相(同)

同 十一月

王鳴盛の史學(同)

三十五年九月

三國同盟と佛伊協商(同)

三十七年九月

續大國民(翻譯)

同 十一月

トロンン蒙古史(解題)

三十八年一月

滿洲國號考(同)

同 三月

古泉研究の沿革(同)

同 九月

見聞雜記(一)(同)

同 十月

見聞雜記(二)(同)

同 十一月

見聞雜記(三)(同)

三十九年二月

倫敦見聞雜記(四)(同)

同 三月

同(五)(同)

同 七月

同(六)(同)

四十年四月

ライブチヒ見聞雜記(同)

四十一年二月

遊技の獎勵(同)

同 九月 政治學、第一編政治學史、
漢代之非官營論(三田學會)

同 第一章 希臘の制度概説
獨逸の政變と財政改革

(三田評論)
同 同 同

同 十月及び 同第二章プラトール及び其
英國憲法の争點(毎日電報)

同 十一月 前後の政治學(同)
自然法に關する學說の變

同 四十二年二月及三月及五月 Emil Reich
遷を論ず(三田學會)

同 氏の史學研究法(三田學會)
英國上院問題經過(毎日電

同 四月 英文學の趣味養成に必要
報)

同 なる小文庫(三田學會)
獨逸中央黨の労働者保護

同 チチエリン著「政治學史」
運動(三田學會)

(同)
愛蘭問題の將來(同)

同 小野塚喜平治著「歐洲現
英文東歐問題參考書一二

代立憲政治一斑」(同)
(同)

同 五月 ドーソン蒙古史(上卷)
歐文史籍便覽(同)

同 同 パーカー著「諸夏原來」
竹越與三郎著「南國記」

(三田學會)
(同)

同 六月 ヒルト教授著「支那古代
柳田國男著「石神問答」

史」(同)
(同)

同 十二月 歐米政黨談、其發達の歴
芬蘭憲法(同)

史と現狀(毎日電報創刊三週
箕作元八著「西洋史講話」

年記念號)
(同)

同	同	葡國革命の由來(毎日電報)	同	五月及六月	英國憲政上の革命(東京日)
同十一月及十二月	同	葡萄牙の革命に就て(慶應義塾學報)	同	七月	波斯政變の由來(同)
同	十一月	社會主義の現状及び將來(三田學會)	同	十月	蔚山籠城物語(讀賣新聞)
同	同	近世史研究案内(同)	同	十二月	過去一年間の回顧(東京日)
同	十二月	レフエレンダムの得失を論じて英國憲政の前途をトす(同)	同	四十五年一月	獨逸に於ける官僚と政黨(外交時報)
同	同	The political History of England, by W. Hunt and R. V. Poole (同)	同	同	露國の政體に付いて(三田學會)
同	同	解散前の英國政界(毎日電報)	同	同	日韓交渉史上に於ける蔚山(慶應義塾學報)
同	同	Andrew D. White: Seven Great Statesmen. (三田學會)	同	二月及三月	清朝興亡史(太陽)
四十四年一月	同	慶長末年英人通商談(同)	同	二月	葡萄牙の革命(太陽)
同	二月	アダムスミスの政治學說	同	同	帝國主義の根本概念に就て(外交時報)
同	四月	印度統治策に付て(殖民學會々報)	同	四月	ストリンドベルヒ(やまと)
同	五月		同	五月及六月	廣東外國貿易獨占制度
			同	六月	(慶應義塾學報)
			同	七月	ルソ一の二名著に現れたる政治思想(新日本)

同	七月	太平天國の革命的意義 (史學雜誌)	同	十一月	歐洲の南方と北方(太陽)
大正元年八月	八月	ル氏最も有望(太陽)	同	十二月より	歐洲政治史論(青年)
同	十月	獨逸政局の開展(外交時報)	大正三年一月		伊國憲政暗中の飛躍
同	十月	新平和主義を評す(慶應義塾學報)	同	二月	(上、下)(外交時報)
大正二年一月	三月	ウイルヘルム大帝(新日本)	同	二月	豹變せるブリアン(東京毎日)
同	四月	歐米の政黨政治(全一卷)	同	三月	フオン・ベイトマン評傳(東京毎日)
同	同	比例代表制度(外交時報)	同	同	佛國政界の二大勢力(三田學會)
同	六月	民權家としての福澤先生(新日本)	同	同	比律賓列島の將來(外交時報)
同	七月	三代目の責任(慶應義塾商工會々報)	同	同	時局の史的觀察(太陽)
同	同	小野塚教授著「現代歐洲の憲政」(三田學會)	同	同	小露分立運動(外交時報)
同	同	佛國に於ける比例代表運動(同)	同	同	歐米政黨の現状(太陽)
同	八月	史學の性質及び任務(東京市主催慶應義塾講演集)	同	同	獨逸の農業保護政策(外交時報)
同	十月	カイザール論(外交時報)	同	九月	歐亞大亂始末記(外交時報)
同	同	英國先帝の外交的活動	同	同	佛蘭西の舉國一致内閣(同)

同	同	英國に於ける官僚の勢力 (日本及日本人)	同	(下、上)(外交時報)
同	同	獨佛兩國軍備充實計畫 (三田學會)	同	英國陸相キチナー元帥 (上、下)(外交時報)
同	同	佛國前首相ブリアン(世界 之日本)	同 十二月	獨逸外交の虚實(外交時報)
同	同	歐洲皇室の姻戚關係(實業 の世界)	大正四年一月	獨佛戦後に於ける兩國民 の態度を論じて日本國民 に警告す(實業の世界)
同	同	歐洲列強の合縱連衡(太陽 陸相としてのミルラン氏 (外交時報)	同	帝王外交と國民外交(廿世 紀)
同	同	最近歐洲議會政治の大勢 (新日本)	同	時局と偉人(東亞の光)
同	同	塙塞反目の近因(外交時報)	同	戦後の文明果して如何 (大阪毎日)
同	十月	世界大戰の中心人物(時事 叢書二、全)	同	近世國際政局上に於ける 三公會(日本及日本人)
同	同	ピットに代てアスキスに 與ふる書(中央公論)	同	元官吏登庸法に就て(史學 雜誌)
同	同	英國に責任ありや(外交時 報)	同	クロボトキンの史觀(三田 學會)
同	十一月	法王ピウス第十世の政策	同	戦亂後歐洲新均勢論(日本 及日本人)
			同	日本民族史に就て(三田評

論

同	八月	ビエーロー公最後の活動 (外交時報)	同	同	列強の戰時外交(太陽)
同	九月	聯合軍戰勝の曉に於ける 世界の大局(新日本)	同	七月	印度統治策の近狀(外交時 報)
同	十月	伊國首相サランドラ(三田 評論)	同	同	臺灣人同化論(三田學會)
同	同	獨逸最員の羅馬法王 (太陽)	同	八月	小野塚教授著「歐洲現代 政治及學說論集(同)
同	十一月	墨銀考(三田學會)	同	九月	時文是非(日本及日本人増刊 現代名家文章大觀)
同	同	御大典に際して(閩南日報)	同	十月	媽祖(三田評論)
同	同	清朝史(慶應義塾甲府講演)	同	十一月	大正の政變を論ず(新公論)
同	十二月	華僑代表に對する抗議 (外交時報)	同	同	米國の外交(米國研究)
大正五年一月		協和思想に就て(東亞之光)	同	十二月	對外政策の標的(外交時報)
同	三月	墨銀考補遺(三田學會)	同	同	民族主義の研究—墺國に 於ける獨逸民族の地位 (三田學會)
同	四月	我シヨイヴァイニストの反 省を促す(新日本)	同	同	政界春秋(經濟時論)
同	同	英國首相アスキスに代て 日本國民に寄す(中央公論)	同	大正六年一月	最近英國の政界とロイド ジヨージ(大學評論)
同	六月	臺灣より歸りて(日本及日)	同	同	英國の新内閣(外交時報)

同	十一月	英國既に倦める乎(外交時報)	同	五月	其勢力(中外)
同	同	日米問題の關鍵(經濟時報)	同	同	露國の背信を如何にすべき乎(外交時報)
同	十二月	第四十議會に要望す(中外)	同	同	皇室社會主義(實生活)
同	同	義莊の研究(三田學會)	同	同	新聞紙の責任(臺灣日々新聞)
同	同	露國の現狀(新時代)	同	五月及六月	戰後の社會(大阪毎日)
同	大正七年一月	講和論の潛勢力(經濟時論)	同	同	民主政治論二種(三田學會)
同	同	英國近代の一偉人(雄辯)	同	同	争闘の最高調に達せる社會主義と軍國主義(新日本)
同	二月	學制改革管見(東亞之光)	同	六月	一民族一國家主義の平和價值と其實現の現國家に及ぼす影響(太陽)
同	同	協同思想基調の民主政治と有産階級代表の軍國主義と(新日本)	同	七月	避け難き獨逸の民主的改革(太陽)
同	三月	政權争奪の徑路(中外)	同	同	新ロシアとレーニンの功罪(新公論)
同	同	獨逸は未だ敗れず(外交時報)	同	同	排外恐外共に不可(外交時報)
同	同	カイヨロ事件の顛末(東方時論)	同	同	支那學の沿革(一)(東洋學報)
同	四月	十三行(三田學會)	同	九月	國民同盟說提唱の由來と

同	十一月	報)	原首相の實踐すべき平民 内閣の實的教訓(新日本)	同	同	新共和國としての獨逸 (新公論)
同	十一月		獨逸をして軍費を賠償せ しむ可し(中外)	同	二月	我が憲政の過去と現在 (大阪毎日)
同	十二月		ウイン公會とタレトラン の活躍(大觀)	同	三月	支那學の沿革(三)東洋學報
同	同		國際聯盟と民族主義(外交 時報)	同	同	デモクラシーとは何ぞや 軍國主義とは何ぞや民族 主義とは何ぞや(國南新策 五・六・七)
同	不明		獨逸崇拜者に告ぐ(東洋日 の出新聞)	同	四月	民主政治の限界(大阪毎日)
大正八年一月			支那學の沿革(二)(東洋學 報)	同	同	國際聯盟と米國モンロー 主義との關係(太陽)
同	同		政治と哲學(中外新論)	同	同	米國の政治組織(實業の日 本)
同	同		普通選舉尙早論(大阪毎日)	同	五月	最近政界に行はれつゝあ る二種の俗論(新公論)
同	同		永久平和の成否(新聞名不 明)	同	六月	英佛伊の戰時内政状態 (太陽)
同	同		國際聯盟徵兵廢止の不可 能を論じて自由貿易自由 移住主義を提唱す(やまと)	同	同	日支提携の要(解放)
				同	同	國際聯盟に就て(東亞之光)

同	同	開國か鎖國か(中央公論)	同	十二月	義莊と祭田と(東洋時報)
同	七月	汪龍莊遺書を讀む(三田學會)	同	大正九年二月	小山清次著「支那勞働者研究」(三田學會)
同	同	匈牙利の政變(外交時報)	同	同	佛國總選舉の成績に就て(外交時報)
同	同	過激派政府の財政狀態(同)	同	同	生存權を疑ひ普通選舉運動に反對す(新時代)
同	同	社會主義は健全なる思想にあらず(改造)	同	同	無政府主義か個人主義か(改造)
同	同	思想の獨立(雄辯)	同	三月	改造の意義(東亞之光)
同	八月	坐食權を排す(新時代)	同	四月	前途の光明に導く(日本及日本人)
同	九月	外交の刷新を望む(外交時報)	同	同	普通運動と病的思想(全一卷)
同	同	西露の民族關係(同)	同	同	民主的産業制(大阪毎日)
同	同	國際勞働規約に就て(同)	同	同	對外思想の改造(外交時報)
同	十一月	「古代國家論」の五十年紀(三田學會)	同	五月	辜鴻銘氏の春秋大義論(外交時報)
同	同	有識階級の歴史と社會的地位(雄辯)	同	十月	現代思想に對する斷片的批評(東亞之光)
同	同	尾西の半日(三田評論)	同	同	
同	同	國策私案(外交時報)			

同	十二月	德富蘇峰著「大戦後の世界と日本」(三田學會)	同	同	べからず(野依雜誌)
大正十年		大戦後と外交(教育冬期講習録)	同	同	太平洋問題の意義及對策(國本)
同	一月	支那學研究法上の一特色(東亞經濟研究)	同	十月	希臘の二大史家(史學)
同	二月	國民外交要義(外交時報)	同	同	雪橋詩話三集(史學)
同	同	日本に於ける戦後の思想の影響(亞細亞時論)	同	同	Sir Ernest Satow; A Diplomat in Japan (史學)
同	同	民主的社會制(國本)	同	同	ナポレオンと文書學校(餘白録)(同)
同	四月	國家思想と中産階級(國本)	同	同	民主政治に就て(東亞之光)
同	同	五來欣造著「社會革命の將來」(三田學會)	同	十一月	民主々義批判(抄譯全一卷)
同	六月	惡左府賴長(中央史壇)	同	同	佐野學著「露西亞經濟史研究」(三田學會)
同	同	ウエンティヒ教授の戦敗と再興とを讀む(大正公論)	同	同	太平洋會議の結果如何(小學校)
同	七月	獨逸にオーストリアとの合同を容認せよ(野依雜誌)	同	同五月より十一年四月に至る	學窓漫録(一一十一)(伊豆半島)
同	九月	太平洋會議は多きを望む	同	大正十年十二月	雲岡石窟に関する文献(中央史壇)

故田中博士略歴並びに其著作年表

同 人口問題と國際的分配の

同 同 ブライス卿に就て(餘白

正義(國本)

録)(同)

同 ロイド・ジョージと比較

同 同 個人主義(野依雜誌)

同 せば(野依雜誌)

同 三月 華府會議を回想して

同 獨逸は唯物思想を捨てる

同 四月 議會の醜態と國民政治思

同 か(野依雜誌)

同 想の啓發(時事問題研究)

大正十一年一月 有色人種は勃興すべきか

同 國家の支配より經濟を脱

同 (國本) カイゼルリングの支那觀

同 却せしむるは不可(實業の

同 (讀書協會甲種會報十七號)

同 世界)

同 冷靜なる判斷を下せ

同 新思想批判(普選・個人主

同 (共存)

義等)(大勢)

同 民主政治論(法學研究)

同 書齋閑話(文華)

同 華盛頓會議批判資料(外交

同 社會主義思想を排す(男)

同 二月 時報)

同 支那に對する國民の覺悟

同 古き外人の觀たる日本國

同 五月 (奉公)

同 民性(史學)

同 地主制度の可否(共存)

同 朝鮮役上卷蘇峰學人著

同 同 梁啓超著「中國歷史研究

同 (同)

法」(史學)

同 歴史家マアドックの一生

同 同 李越縵著「越縵堂日記」

同 (同)

同 同

同	同	「舊佐賀藩の農民土地制度」(同)	同	同	一元的國家と多元的國家(共存)
同	十二月	思想改造論(實業)	同	三月	政治家の理想と政治の實際(時事問題研究)
同	同	豫算案決定、歐米の政變(同)	同	同	官僚政治萬能論(實業)
同	同	月山々房雜記(同)	同	同	産業組合中央金庫、ヨツ
同	十二月	個人と社會(文化大學)	同	同	フエ氏の來訪、米國の金塊死藏(同)
同	大正十二年一月	民主々義の保證(三田評論)	同	同	熱海に遊びて(伊豆半島)
同	同	反動思想の特徴(實業)	同	同	ラアスキイ氏の國家論(法學研究)
同	同	新年所感、英國政變(同)	同	同	談話(同人)
同	二月	地租に關する最近の論義(同)	同	同	社會主義評論(伊豆半島)
同	同	郵便條約問題、佛軍のルウル占領米國の覺醒?(同)	同	四月	再び地租を論ず(實業)
同	同	「鹿兒島藩の門割制度」(史學)	同	同	所謂廿一箇條問題、中間景氣(同)
同	同	時代思潮變轉の曙光(外交時報)	同	五月	財産相續制度論(同)
同	同	露西亞の新經濟政策(外交時報)	同	同	日支親善問題、軟弱外交が親善を阻碍す(又新公論)
同	同		同	同	月山々房雜記(實業)

同	同	石井ランシング協約廢棄	同	同	(史學)
同	同	活動の季節(同)	同	同	下田將美著「愛蘭革命史」
同	同	文化生活に就て(共存)	同	同	(同)
同	六月	政黨の本分(實業)	同	同	(以上二篇九月一日震災のため焼失)
同	同	時評(實業)	同	同	ヘルデル「歴史哲學」上卷
同	七月	農民の政黨運動(共存)	同	同	忽卒の間の調査であるから、もし遺漏があらば
同	同	英國の政治(實業)	同	同	御報告にあづかりたい。
同	同	對外交渉、排日益す甚し	同	同	(追補)
同	同	社會主義者の檢舉(同)	同	明治三十五年三四月	野菊(匿名)(慶應義塾學報)
同	同	農村の振興と低利資金の	同	同	ゴルキイの人世觀
同	同	融通(斯民)	同	同	(匿名)(同)
同	八月	土耳其の新生(三田評論)	同	同	古王宮(匿名)(同)
同	同	國際聯盟の成績(實業)	同	大正八年十一月十二月	露國の第一革命(大阪毎日)
同	同	國民軍事研究團、浦鹽の	同	同	アリストフアネス(女の議
同	同	近狀、浮世の雜事(同)	同	同	會(瓢雪)(新公論)
同	九月	社會主義の宣傳(實業)	同	同	ブライス卿著「現代民主
同	同	日露交渉の頓挫、ルウル	同	同	政治」第二章民主政治の
同	同	占領の問題、義務教育延	同	同	根本下(日本讀書協會甲種會報)
同	同	長問題(同)	同	同	ブライス卿に就て(同)
同	同	田中義成著「足利時代史」	同	同	

故田中博士略歴並びに其著作年表

同 同

普通選舉と財産資格(クリエック
クシヤンタ著)(同)

大正十一年十二月

青年と政治(郷友)

同 十二年一月

新春の初頭に立ち同胞の

省察を促す(やまと)